

台湾における結婚移住者の教育観：
日本人父親のライフストーリーから

渡辺 幸倫
WATANABE Yukinori

台湾における結婚移住者の教育観

日本人父親のライフストーリーから

渡辺幸倫

概要

本稿は2019年の台湾奨助金(Taiwan Fellowship)の助成を受けて実施した The educational views of marriage migrants in Taiwan: The life stories of Japanese fathers の調査結果をまとめたものである。本研究では、日本から結婚移住を経て台湾で子育てする父親の様相をライフストーリーの手法を使って聞き取りを行った。日本と台湾の関係の中で生起する移住した親の自己形成プロセスを分析することで、アジアへの日本人結婚移民の教育意識がどのように構築されているのかを考察した。教育意識には世代を超えたアイデンティティ変容の枠組みが象徴的に表れる。しかし、既存の「親の教育観」に関わる研究は母親を対象にしたものが大半で、父親に関するもの、特に国際結婚を前提とするものはほとんどなされてこなかった。そこで本研究では台湾で子育てする父親たちについての基礎的な理解の醸成を目指し、収集した様々な事例を3つのモデルに集約して描写し、それぞれのモデルの背景理解と解釈を深めるための注釈をつけながら論点を提示するという実験的な形式をとった。

考察の結果、父親たちは「大黒柱」と「イクメン」の二つの言説の中で葛藤をしていること、「大黒柱」として機能するためには台湾と日本の間に立つ仕事を選ばれやすいこと、「イクメン」には日本語教育の責任も含まれていることなどがわかった。さらに、「大黒柱」であることは「イクメン」であることより重要であると考えられているものの、十分に「イクメン」をできていなければ自責の念を覚えることも見て取れた。また、「大黒柱」として台湾でキャリアを積んでいくことは自身の「稼ぐ力」が台湾社会に最適化していくことを意味し、日本への帰国や他国への再移住が容易ではなくなっていくこと、また台湾の親日的雰囲気も相まって台湾社会を愛好する気持ちが強いことなども観察できた。

このような状況を前提に、台湾で子どもが育つことを受け入れたうえで、日本的な教育をどのように行うのが課題となっている。学校選択は重要な指標であった。現地校の教育競争には概して懐疑的だが、一定程度の水準にあるという理解もある。一方、日本人学校は高校の部がないため、どこかの段階で日本への「帰国」を考慮する必要がある。これらの状況下では、「稼ぐ力」が台湾社会に最適化されている程度の高い父親たちは台湾滞在を選び、現地校を選択し、付加的に日本語を教えていくという選択になりやすい。逆に日台間の貿易などを扱う自営業や日本でも仕事を見つけやすい技術者などは日本への帰国なども考慮しやすくなっていた。このような形で、「大黒柱」であることと子どもの教育はつながっているとみてよいだろう。無論、父親たちの生活は多様である。しかし、あえて全体に共通している点をあげれば、「標準」からの逸脱に寛容ということが言えそうだ。国際結婚は日本台湾両国で一定数あるものの非標準であり、この決断をした人生の中で、子どもの教育を考えている。彼らが子どもの教育も非標準であってもよいという柔軟な考えを持つのだろう。

婚後移居台灣者的教育觀：從日籍父親的生活故事談起

渡辺幸倫

概要

本稿為 2019 年獲得台灣獎助金所實施之研究關於「婚後移居台灣者的教育觀：日籍父親的生活故事」的調查結果所整理而成，本研究係透過訪談方式窺知婚後從日本移居台灣的日籍父親對教育子女的樣貌，以這樣的人生故事來進行此項研究。分析在台關係中的父親角色形成的過程，針對亞洲的日籍人士結婚移民者的教育意識是如何建構而成進行考察。對於教育意識，象徵性地顯現了跨越世代身分認同框架的轉變。然而，對於既存的「父母的教育觀」相關研究，以母親作為研究對象者佔大多數；有關父親的研究，特別是以國際結婚為前提條件下作為研究對象者卻寥寥無幾。故本案以關於婚後移居台灣的外籍父親們教養子女方式的基本認識做為初步醞釀本研究的目標，並收集各種實例，匯集三個範例為主軸，描寫而成，為了更深入說明每一個範例其中的背景認知與解釋，並提出採用實驗性的方式所得結果來論證。

考察結果指出，父親們常在「經濟支柱」與「育兒父親」的兩種說法之間產生矛盾，因為父親身為「經濟支柱」的功能，會傾向選擇能成為台日之間橋樑的職業，對於「育兒父親」一詞中也清楚可知兼負了教育子女日語的責任。雖然「經濟支柱」比起包含負責教育子女的「育兒父親」被認為更為重要，卻也看出無法兼顧「育兒父親」之責的期望而感到自責。再者，在台灣身為「經濟支柱」本身所累積的職業謀生能力即意味著他們在台灣社會地位層級正邁向優化，加上台灣親人情節相輔之下，可觀察到他們偏向選擇移居台灣的感覺較為強烈。

在這類狀況的前提之下，讓子女在台灣接受教育抑或是實施日本式的教育將成為他們的課題，而選擇學校也成為了重要指標。一般而言在地學校的教育競爭雖是抱持質疑的，但可理解的是台灣教育標準仍具有一定程度之水準。另一方面，因為在台灣尚無日本學校高中部的關係，必須考慮到讓子女在哪個階段歸國就學。像這類的情況，具備「謀生能力」且在台灣有高階職涯發展的父親們選擇讓子女滯留台灣就讀當地學校，也便於選擇附有教授日語的學校。反之，在台日間從事貿易等的自有營業者及高端的技術人士也可能會選擇返回日本。在這事件的決擇上，讓身為「經濟支柱」的父親角色可以說是含括了子女的教育責任。總結可知，雖說國際結婚在台台中有一定程度的族群對於兩國的標準教育模式期望不盡相同，但各種在台日籍父親們的生活具有多樣性，若要說全體的共通點的話，可以說成是從「標準」中灑脫地寬容接受台日間教育差異。他們必須在這種決斷的人生當中，考量子女的教育方式。推論他們對子女教育即使並非標準化，但也抱持了彈性接受的想法。

The educational views of marriage migrants in Taiwan

The life stories of Japanese fathers

WATANABE, Yukinori

Summary

This paper reports the research outcome of a study entitled *The Educational Views of Marriage Migrants in Taiwan: The Life Stories of Japanese Fathers*, which was funded by the Taiwan Fellowship 2019. In this study, the researcher conducted eighteen life-story interviews to understand how educational belief is constructed through the complicated process of migration from Japan to Taiwan. Studying educational beliefs allows us to reveal the framework of transformation of identity across generations. Past studies, however, have predominantly focused on the mothers' perspectives and left fathers' stories unstudied, especially in intermarriages. Therefore, this study adopted an experimental method to provide necessary information about fathers by generating three integrated stories with annotation so that the researcher could present essential issues about their experience of migration.

As a result, the following aspects of paternal identity were revealed: (1) fathers are in conflict between traditional and modern discourses, more specifically "being the prime provider of both financial and moral support to the family (*Daikokubashira* 大黒柱)" and "being the one who voluntarily takes care of his children (*Ikumen* イクメン)," respectively. However, in general, being *Daikokubashira* is considered more important than being *Ikumen*; (2) for fathers, being *Ikumen* includes being responsible for teaching Japanese to their children. Therefore, they tend to feel remorse if they fail to raise children's Japanese to the level they expect; and (3) when fathers function as the *Daikokubashira*, they tend to choose a job that bridges Japan and Taiwan, which easily results in adopting Japanese-style long working hours. Furthermore, as they advance their careers in Taiwan as the *Daikokubashira*, their job skills are optimized to Taiwanese society, which makes it more difficult to move back to Japan or to a third country. It was also observed that their preference to live in Taiwan was partially supported by Taiwan's affinity towards Japan.

Considering these preconditions, most of the Japanese fathers accept their children growing up more as Taiwanese, and their concern becomes how to incorporate teaching the Japanese language and culture in the process. Choosing between a local and a Japanese school is an important indicator. They are quite skeptical about the competitive nature of Taiwanese public education, though they recognize its standard of education as good. Meanwhile, the absence of Japanese high schools in Taiwan makes them consider either returning to Japan as a family or sending their children to Japan at some point. This is the rationale behind their tendency to choose a local school and teach Japanese as an additional or heritage language, especially for the fathers whose careers are optimized to work in Taiwan. On the other hand, some whose skills are flexible, such as business owners and highly skilled professionals, might choose to relocate. In this manner, *Daikokubashira* discourse binds the choice of fathers' essential decisions, including the education of their children. On a final note, most fathers show tolerance towards deviation from Taiwanese or Japanese standard education models, as if their migration and intermarriage experiences were stepping stones to becoming more accepting and flexible about education.

1. はじめに

本稿では、台湾の外交部による 2019 年の台湾奨助金 (Taiwan Fellowship) の助成を受けて実施した The educational views of marriage migrants in Taiwan: The life stories of Japanese fathers の調査結果をまとめた。本研究は、先行して行った『多文化家庭の子育て戦略の課題 ―日韓中の国際カップルへのインタビュー調査 (研究課題番号: 25381142) 2013-2015 年度』、『越境する結婚移住者の教育観に関する基礎調査: 国際結婚した在外日本人父親の言説分析 (研究課題番号: 16K04630) 2016-2018 年度』から直接の着想を得た。これらの研究では、日本、韓国、中国、タイ、フィリピンに居住する国際結婚家庭にインタビューし、対象国での教育にまつわる課題を立体的に記述することを目指し、各国で非「標準」である国際結婚をしたカップルがそれぞれの文脈で大胆かつ細心な教育戦略を練り、実行している様相を描いた (渡辺 2014, 渡辺他 2015, 渡辺他 2016)。特に後者の日本人父親に着目した研究では、所得格差や費用対便益といった要因だけでは説明できない多様な移民現象が随所で確認でき、移民元と移民先の「ローカル」が交差・混淆するトランスナショナルな空間としての多文化家庭のあり方が浮かび上がってきた (渡辺・久保 2018, 渡辺他 2019)。

本研究は、これらの先行調査の枠組みを受けて、台湾での日本人夫と台湾人妻のカップルの子育てに着目し、日本人父親のライフストーリーを収集し分析した。以下、台湾における国際結婚家庭の状況や父親たちの教育観の現代的な特徴を考察したい。

2. 研究の背景

2.1. 在台湾日本人数と日本人配偶者数の推移

在台湾日本人の概況を知るために統計情報は重要だ。内政部 (2019) によると台湾における国際結婚は、外国籍・大陸・香港・マカオが分かれて算出されている。これによると 2005 年に 7.74% だった外国籍者との結婚の割合は 2011 年の 2.44% まで下降し、その後徐々に上昇に転じて 2019 年には 4.84% まで戻ってきている。大陸・香港・マカオ出身を含めると 2005 年が 11.91%、2011 年 6.51%、2019 年に 8.00% となり、やや 2011 年以降の上昇の程度が少ないが、ほぼ同じような推移を見せている¹。

また外国籍の者が台湾に 6 か月以上居住する際に必要な「居留証」所持者の各年末における実数はこの 10 年で年特に増加し、2019 年に 785,341 人を記録した。それに対して日本人は 8,000 人から 12,000 人程度の間で緩やかに増減を繰り返していたが、2019 年に近年のピークである 13,400 人 (男性 7,673 人、女性 5,727 人)² となった (図 1)。

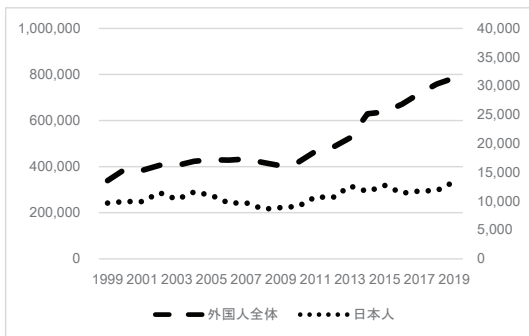


図 1 在台湾外国人数と日本人数の推移 (内政部 1999-2019)

¹ なお、同じ期間の日本の国際結婚率は 6.12%-3.25% の範囲で推移している (政府統計の総合窓口 (e-Stat) 2020)。これらの数値をみると実生活における国際結婚の存在感は日本よりもやや大きいとみてよい。在住者にとっても生活の実感と統計データを突き合わせながら台湾理解を進めることは関心事のようで、かなり専門的な知見を発信している有名ブロガーもいる。もっとも充実した考察をしているのは「台湾で牛肉麵を喰らわない 台湾中級者以上にも刺さる情報」 (<https://taiwan-gyunikumen.style/population/>) であろう。

² 台湾不在者を含む年末時点での居留証所持者の総数は、男性 10,969 人、女性 7,882 人の合計 18,851 人。

外国人の大半が人手不足を補うために導入された東南アジアからの労働者や結婚移住者とされるが、先述の約 78.5 万人のうち台湾人の配偶者となっているのは 4.8 万人ほどで、全体の傾向としては女性の割合が大きい（30 対 70）。しかし、日本人は 13,400 人の長期滞在者のうち 3,405 人が台湾人の配偶者で、男女はほぼ半々（46 対 54）である（図 2）。一般に結婚移住においては女性が移動することが多いと考えられている（Piper & Roces 2004, Ishii 2016）。この傾向は他の台湾以外のアジア諸国でもあまり見られず（渡辺・久保 2018）、在台湾日本人の国際結婚の特徴といって良いだろう。

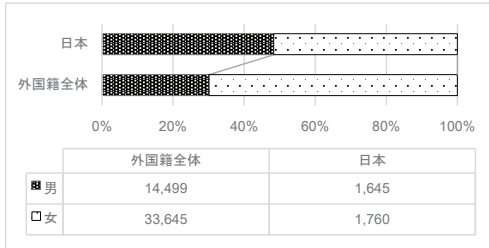


図 2 台湾人を配偶者とする日本人と外国籍全体の男女比（内政部 2019）

2.2. 先行研究の動向

2.2.1. 国際結婚研究のジェンダー化：移住した日本人父親の視点の欠落

本研究の位置づけを考えるにあたって、まず本項で周辺分野も含めた全体像の把握のため、日本人の海外移住、日本人の国際結婚、そして日本における父親の子育て参加についての三分野の研究を概観する。その上で、次項で台湾についての研究をより詳細に検討したい。

海外へ移動する日本人を対象とした研究では、「新興国から先進国へ」という経済移民とは異なり、現地での生活を選好する形で海外へ移動する日本人を対象とした研究が進んでいる（佐藤 1993, 藤田 2008, 松谷 2014, 齋藤 2017）。近年はこれように精神的な充足感を求めて移動するインドネシア・バリ島への「ライフスタイル移民」と国際結婚を結び付けて考察する研究も出てきている（スアルティニ 2014）。また丹羽・中川（2015）の調査では、タイ・バンコクでの生活を選好し現地採用の仕事を選択した者は、タイでの生活にも満足している傾向が強く、既婚者の多くがタイ人と結婚していたという。特定の国や地域を選好することの帰結として国際結婚はひとつの典型といえそうだ。しかし、これらの研究は移動動機に着目したものや、個人の選択の結果としての移住先での生活が主な対象であり、本研究が念頭におく「国際結婚から子育て」という時間的広がりを持った選択を家族で（あるいは家族の一員として）決定するという構造を伴う過程（プロセス）は対象となっていない。

一方、国際結婚についての研究としては、蔵本（2017）が、国内外のデータベース（ProQuest、CiNii）により 100 年以上の期間を対象に異人種異民族異文化間カップル（*interracial couples/marriage, intercultural couples/marriage, cross cultural couples/marriage* など）や国際結婚をキーワードにした研究を分析した結果、移住した側の「外国人夫を対象にした研究はほとんどない」ことを主な知見の一つとしてあげている。日本を含むアジアにおける国際結婚をテーマにした研究も妻・母親側の視点に立ったものが多い（Piper & Roces 2004, Ishii 2016）。なかでも日本人男性と外国人女性の組み合わせについての研究では、「弱者」である女性を支援しようとする文脈で行われているものが際立つ（河原・岡戸 2009, 武田 2011, 佐竹・金 2017）。女性の直面する問題の緊急性や深刻性と対比されているためか、日本人男性は経済的、権力的な優位性などの文脈で語られることが多く、研究の対象としてやや見えにくい状況に置かれてはいなかっただろうか。このような傾向は外国に居住する国際結婚した日本人の研究でも同様で、移住した日本人妻についての研究が多い（竹下 2000, Hamano 2019）。

なお、台湾社会を対象にした研究でも同様の傾向がみられる。日本国内で発表された研究の他に、台湾全文資料庫や華芸線上図書館などのデータベースで検索したが、次項で述べる研究を除

くと、「嫁不足解消のために海外から招かれた花嫁である新台湾人の社会統合」を念頭ににした研究が多く、教育についても子どもの社会統合を主題とした研究が多い傾向がある(施他 2007, 黄 2014)。台湾に移動してきた外国人の父親を主に扱ったものは、わずかに、夫への虐待を扱った研究がみられる程度であった(尹他 2011a, b)。

これに対して、日本国内での子育て研究の分野では「父親」を対象とした研究が増加している。たとえば NII 学術情報ナビゲータ (CiNii) によると、「父親」と「子育て」が含まれる論文は、1980 年代には 9 件であったが、90 年代には 81 件、2000 年代には 264 件、2010 年代には 275 件となっており、父親の子育て経験やそれを取り巻く言説の分析も進んでいる(石井クンツ 2013, 高橋 2016, 多賀 2016)。2018 年に出版された『教育社会学辞典』でも「父親の育児」の項目が設けられ、父親の育児参加を求める社会的な変化や、その変化に対する父親たちの対応のあり方などが議論されており、幅広い関心を集めていることがよくわかる(日本教育社会学会 2018)³。しかし文脈として国内の国際結婚家庭が対象となることすら極めて限定的であり、海外在住者の父親に至ってはほぼ対象にすらされてこなかった。

つまり、既存の子育てする親の教育観に関わる研究は居住地が日本か外国にかかわらず母親を対象にしたものが大半で、父親に関するもの、特に国際結婚を前提とするものはほとんどなされてこなかった。本研究が扱う海外在住の国際結婚家庭における父親の子育て経験は、日本人の海外移住の研究としても、国際結婚家庭の研究としても、父親の子育て経験の研究としても、探求が求められている分野ということができよう。

2.2.2. 日台国際結婚家庭の子育てに関する研究：親の教育意識の諸相

日本と台湾の国際結婚には長い歴史がある。そこには国をどのように考えるのかという問題が常に表出する。この関係をつまびらかにすることは本稿の目的ではないが、鄭成功の母親が長崎出身であったとされていることや、日本統治時代の内台共婚、現在の中華民国と日本の関係と、どれをとっても複雑である。しかし、ここでは本研究の扱う現在 30 代から 50 代の世代を主な対象としている研究を検討したい。

竹下 (2004) や片山 (2015) は、日台カップルの日本人妻が社会的ネットワークを通じて適応する様相を描いている。竹下 (2004) は日台国際結婚の歴史的な変遷をそれぞれの時代の当事者の思いとともに示し、日台国際結婚の流れの中で理解するのに不可欠な知見を提供してくれる。片山 (2015) は、ライフストーリー法を採用しており、国際結婚を出会い、結婚、移住、定着というプロセスととらえる視点を持ち、本研究の関心と近い。しかし、いずれの研究も日本から台湾に移動した日本人妻の現地適応を対象としており、日台国際結婚研究の上で有用な枠組みを提供しているものの、日本人の父親や子どもの教育は副次的に扱われているに過ぎなかった。

これに対して、金戸 (2007, 2009) は、現地での生活を選好する形で台湾へ移り住んだ者たちを対象に、「自発的移住」という概念を手掛かりとして、ライフヒストリー法を用いた移住経験の聞き取りを行った。対象を国際結婚者や子育て中のものに限らない幅広い層としたため、1990 年代後半から 2000 年代初頭の日台関係の全体像を理解するうえで非常に有益な知見を提供してくれる。また、この研究は問題意識のひとつに、これまでの研究の対象がほとんど女性に特化されていることをあげており、この視点は本研究と共通する。同研究は移住そのものの経験が中心的課題ではあるものの、本研究が着目する国際結婚家庭における教育意識についても一部で触れられている。本研究はこの部分をより深めていくと考えてよいだろう。

また、日台国際結婚と教育というテーマでは、武田 (2016) が、グローバル人材の養成という観点から在台湾子育て世帯を対象にした質問紙調査を実施し、日本人結婚移住者の子どもの教育を念頭に入れた様々な論点を提示している。なかでも、日本と台湾の両方を理解する子どもを育むための新しい枠組構築を提唱している点は重要である。端的な例として、日台国際結婚の子どもが日本の大学で学ぶ際に、「日本人学生」「外国人留学生」「帰国子女」といった従来の枠のみでは様々な不都合が出ていることがあげられている。通常データとして抽出することの難しい

³ 同じく日本教育社会学会によって編集された『新教育社会学辞典』(1986 年版)では、「父親」という項目がある。しかし、子どもとの関係の中で父親のあり方を模索する動きは論じられているものの、積極的に子育てに参加する(べき)存在としての父親像は示されるには至っていない。

世帯収入の分布を示したうえでの主張であり説得力がある。ただし、この主張の説得力を減じるものではないが、回答者の 95%以上が結果として女性であったことはこの調査の特徴の一つでもあるだろう。

一方、台湾在住の日台国際結婚家庭における継承語としての日本語教育の研究には特に優れたものが多い（伊藤 2015, 服部 2015, 谷口 2013, 2019）。谷口（2013）は、歴史的な観点から日台国際結婚を取りまとめ、そこから継承語としての日本語教育について考察している。戦後の各時代の経済・文化交流の状況をあげながら、日台の人の交流の活性化が、日台双方の肯定的な意識醸成につながり、結果として日台の国際結婚が増加したと分析している。さらに、近年の日本人と台湾人の出会いのパターンが多様化するにしたがって、家庭言語や居住地決定要因が複雑化し、これがまた継承語として日本語教育を行う方針に影響するという本研究にもつながる指摘がなされている。

伊藤（2015）と服部（2015）はいずれも台湾在住の日本人妻・母親を中心に据えた研究で、主に現地校に通学させながら家庭や週末の日本語補習授業校などを通した教育によって母親の言葉を継承するための、様々な試み、葛藤、子どもの反応などが克明に描かれている。これらの研究からは、継承語としての日本語教育という点で困難に直面する家庭があるものの、その一方で日本人母親の献身的な活動によって日本語を継承し得る道筋が見えてきていることがわかる。また、このような母親たちの活動が単に自己犠牲としてではなく、自身の自己実現の一つとなっていることも読み取れる。ただしここでも、日本人父親は例外的に登場するにすぎず、父母の出身が入れ替わることで家庭内の言語的・経済的・社会的環境が大きく変わってくる可能性があるにもかかわらず、その詳細については課題として残されていた。

以上のように、日台国際結婚家庭の教育についての研究も、世界的潮流と同様に妻や母親の視点に立った研究が多く、ジェンダー化された傾向を呈している。ライフストーリー法を使い移住という過程の中で国際結婚の考察を行うものもあったが、教育については、継承語としての日本語教育という観点からの研究が多く、武田（2015）のように国際結婚した日本人側の親の教育意識を扱ったものはあるものの、主に質問紙調査という手法がとられており、結果的に母親の意見をより強く反映しているという特徴もあった。そのため本研究のように父親に着目し、手法としてライフストーリー法を援用することで、これまでの研究が提供してこなかった新しい知見を得ることができると考える。

3. 調査について

3.1. 調査の概要

本研究では、海外で子育てをする父親たちの教育観について考察する事を目的に、先行する研究の方法（渡辺他 2016, 渡辺他 2019）と同じく、ナラティブ理論に基づく枠組みを使い、国際結婚を経て海外で子育てをする日本人父親を対象に、子育て・教育を軸にしたライフストーリーをフォーマル・インタビューの形で収集した。また、フィールドワークとして、在住日本人の様々な会、学校、児童施設などを訪問し、観察やインフォーマル・インタビューなどを通した知見も蓄積していくことで、父親たちの語りを多角的に考察できるように努めた。

スケジュール

2019 年 8-9 月	2019 年 10-11 月	2019 年 12 月-2020 年 1 月
基礎研究（文献調査） 予備調査（現地調査）	課題の整理 本調査実施	フォローアップ調査 研究成果の取りまとめ

今回は報告者初めての長期（5 か月）の在外研究であり、生活拠点を台湾に移してのものとなったため想像以上に生活を落ち着かせるために時間がかかった。しかし 10 月以降はおおむね予定通りに調査を進めることができた。台湾奨助金（Taiwan Fellowship）関連では各種の大変興味深いセミナーや会合・文化体験などが台北で行われていた。しかし、相模女子大学の提携校の文藻外語大学のある高雄に拠点を構えたためあまり出席できなかったのが残念であった。

3.2. フォーマル・インタビュー

本研究の中心はライフストーリー法を念頭にした半構造化インタビューとした。インタビューが確定した時点で、本人の教育・職業上の経験、配偶者との出会いから出産までの経緯、言語教育、学校選択、両国の関係についての子どもへの示し方のような質問（後掲）を送付し、実際のインタビューでは、質問事項にかかわる教育的決定が本人の人生の中でどのように位置づけられているのかを探りながら聞き取りを行った。インタビューはおおよそ録音部分で 1.5-3 時間程度であった。インタビューは必要に応じて文字化し、分析は語られた内容を単位にテーマごとに分類し、項目ごとの相互関係や全体像についての考察を行った。

インタビュー協力者は調査者の友人・知人を起点に募った⁴。研究の趣旨を鑑み父親優先としたが、母親や日台国際結婚の子どもについても協力が得られる場合にはインタビューを実施した。結果として、合計 18 人にインタビューをすることができた。内訳は、父親 12 人、母親 4 人、日台国際結婚の子ども 3 人（母親との重複含む）であった。具体的には下記の通りである。

フォーマル・インタビュー協力者一覧

	日時	名前	年齢・性別	居住地	録音時間	備考
1	2019 年 9 月	大野	40 代・男性	台北	1 : 11	日本人前妻との子が二人。12 月に離婚
2	2019 年 10 月	平木	50 代・男性	高雄	1 : 06	
3	2019 年 10 月	丹波	40 代・女性	高雄	1 : 46	母親
4	2019 年 10 月	安本	40 代・男性	高雄	1 : 42	
5	2019 年 10 月	大下	20 代・女性	高雄	0 : 51	父日本・母台湾の子
6	2019 年 10 月	花沢	40 代・男性	高雄	1 : 15	
7	2019 年 10 月	笹山	20 代・男性	高雄	1 : 19	父日本・母台湾の子
8	2019 年 11 月	宇野	50 代・男性	台北	1 : 28	
9	2019 年 11 月	安藤	40 代・男性	台北	3 : 23	
10	2019 年 12 月	原本	40 代・男性	台北	3 : 09	
11	2019 年 12 月	吉田	40 代・男性	台北	1 : 32	
12	2019 年 12 月	安倍	50 代・女性	高雄	3 : 05	母親
13	2019 年 12 月	田部	40 代・男性	南投	1 : 46	
14	2019 年 12 月	石井	60 代・男性	南投	0 : 53	奥さんの連れ子
15	2019 年 12 月	菅沼	50 代・男性	南投	1 : 15	
16	2019 年 12 月	水野	40 代・女性	高雄	1 : 20	母親
17	2019 年 12 月	高木	40 代・女性	高雄	1 : 59	母親かつ父台湾・母日本の子
18	2019 年 12 月	末山	40 代・男性	高雄	1 : 31	

名前はすべて仮名（敬称略）

インタビューでの質問について

主な質問事項は次の通りであるが、話の流れや本人の「語りたいストーリー」を重視した。また必要に応じて理解を深めていくための追加質問をしていったが、なるべく話の流れに従って自由に会話をするように話を引き出すよう心掛けた。

- 基礎情報
 - 現在の家族構成、お仕事など
 - ご自身の教育経験など
- 出会いから現在までの経緯など
- 言語教育について
 - 現在子どもが接している言葉の割合について
 - 言語教育についての考え（何語を、いつ、なぜなど）
- 学校選択について
 - 現在の学校について（選択の理由、満足度など）
 - 今後の方針について（どこで、どのような教育を受けさせたいか）
- 国同士の関係について
 - 子どもへの伝え方（どのように、なぜなど）

⁴ 研究の開始時点から、紹介を依頼する際には、あえて「日本人父親」を厳密に定義せず「日本からきて台湾の方と結婚して、こちらで子育てされている男性」としたが、結果として、全員日本で主な教育を受けた日本国籍者であった。

3.3. フィールドワーク、インフォーマル・インタビュー、文献調査など

フォーマル・インタビューの他に、フィールドワークとして下記の場所を訪問し、観察および数多くのインフォーマル・インタビューを行った。その際に作成したメモはフォーマル・インタビューの実施や分析の際に大いに役立った。

- 新竹日本語補習授業校（土曜日に行われる継承日本語校）
- 寺子屋高雄（月二回ほど日曜日に行われる継承日本語校）
- あそぼう会（高雄）（日本人親による自主プレイグループ）
- 居留問題を考える会（台湾各地に支部がある在住者による法律懇談を中心にした会）
- 高雄日本人会
- 高雄日本人学校
- 台中日本人学校
- 中正国民小学校（高雄）
- 児童館（高雄市政府社會局兒童福利服務中心など）

文献調査は、主に台北の国家図書館で行った。また台湾奨助金（Taiwan Fellowship）が受給者を対象に開催する文献調査のセミナーは大変有益で、各種のデータベースを通して多くの文献と出会うことができた。特にセミナーの講師を担当していただいた城菁汝先生にはセミナー後に個人的にも調査を助けていただき、大変多くの情報と助言をいただいた。

また、台湾における日台国際結婚家庭におけるバイリンガル教育の専門家である国立台湾大学の服部美貴先生、国立中山大学の伊藤佳代先生には研究成果の取りまとめ期に、それぞれ数時間にわたってご指導いただいた。

4. 調査の結果

4.1. 調査結果提示の方法について

本研究では台湾で子育てする父親たちについての基礎的な理解の醸成を念頭に、様々な事例を収集した。現在、海外で子育てする日本人父親についての知見はあまりにも少ない。そのため収集した事例の分析、解釈、公開方法についても工夫をすることが求められる。

報告者は、これまでライフストーリー研究の成果公開・還元等でいくつかの試みを行ってきた。『新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集の作成』では、100 のライフストーリーを冊子と WEB 媒体で公開していった（渡辺 2012）。その意図は、ひとりひとりの人生をそのまま届けることで、多様な生き方を示すことであった。分量が多いことから、「人々の多様性を感じることができた」という声と同時に、「すべてに目を通すのが難しい」という声も聞こえてきた。一方、海外子育て中の父親たちを対象にした研究（渡辺他 2019）では、海外子育ての「考える材料」を求めている親たちの声にこたえるために、手にしやすさを重視した海外子育てでエッセイ漫画を作成した。内容はきわめて抽象化されたもので、解説を伴う形でもないため、誤解を招く点もあったかもしれない。しかし、公開している WEB ページ⁵では、短期間にそれまでの論文や報告書の数百倍のダウンロード数となった。もちろん両者は性質の異なるものであるが、フォーマットの違いによって読み手に届く数は大きく変化する。しかし、水準の高い漫画にするにはプロの漫画家の協力が必要であり、必ずしも手軽にできる手法ではない。

そこで本稿では、多くのインタビューで聞いたストーリーを 3 つのモデルに集約・抽象化しながら記述した。さらに、各モデルの背景理解と解釈を深めるために注釈をつけながら論点を提示するという実験的な形式をとった。具体的には、タイプの違う 3 人の話を基礎のストーリーとして選び、個人が特定できないような匿名処理をしたうえで、他の方の経験で日本人父親性を示すうえで象徴的な出来事を組み込んでいく形で作成した。また執筆にあたっては父親たちにも説得力を持つように、インタビューをした方々にも事前に目を通してもらった。

⁵ 相模女子大学 渡辺幸倫 http://www.sagami-wu.ac.jp/faculty/arts_sciences/english/teacher/details/watanabe_yukinori.html

4.2. 台湾に結婚移住した日本人父親たち：3つのストーリー

(1) 栃木さん (53 歳)、14 歳男子、会社員

駐在から始まった台湾生活「日本的なことを生かして台湾で生きていくのが有利。だから日本人学校から日本の高校のつもり」

台湾までの経緯

福島県いわき市出身。妹が一人。高校卒業後、大学進学とともに上京。大学では機械工学とコンピューターを学んだ。就職は電機・機械系の会社の技術職。基本的に機械系だったがパソコンのコードを書くことも学んだ。31歳の時に仕事が一段落ついたタイミングで休職。会社は微妙な時期ではあったが、自費無給の留学だったからか意外と簡単に認めてくれて半年間カナダへ。昔から外国に憧れがあって、いつかは住んでみたいと思っていた。帰国してからは英語ができるからということもあって海外要員になり、台北郊外の工場に派遣され、監督および技術指導の仕事をすることになった。朝から晩まで仕事だったが充実していた。会社の日本人はほとんどみんな同じ寮に住んでいて、生活上困ることもなかったが、郊外ということもあって娯楽がなかったのが不満だった。そんな時に台湾人の同僚に連れられて参加した旅行サークルで妻と出会った。バスで近くに座った時にいろいろと世話を焼いてくれた。初めのころは中国語を習ったり、日本語を教えたりというのがデートの定番。もともと日本に興味があったそうで、付き合うようになってからは、日本語教室にも通ってくれた。出会ってから2年ほどで結婚。34歳くらいの時。

家族の反対を説得して結婚、日本帰国、独立して台湾へ

自分は理系で内にもっているタイプだったので、日本の両親は結婚できるということでも喜んでた。しかし妻の方は一筋縄ではいかなかった。妻は弟が二人と妹が一人の長女、さらにお母さんは5人の兄弟姉妹の一番上。母方はこの世代で最初の結婚ということもあり、おじさんおばさんの中には「とにかく慎重に」と反対する人も多かった。だいたい「日本人は亭主関白だから気をつけろ」⁶、とか「台湾にずっといないかも」と心配していた。しかし、すべてを説得して回るのはではなく、その世代を飛び越えて、当時存命だった台南の妻の祖母のところにあいさつに行った。妻の母もあまり知らなかったが、祖母は日本語がとても堪能で、しかも亡くなった妻の祖父は若いころに東京に住んでいたことまであったという。それもあってすぐに打ち解けることができ、祖母が了解してくれたので、そのほかの親族もOKとなった。結果的には、その後、いとこたちもアメリカ人と結婚する人もいたり国際的になったけど、やはり世代の初めだったので厳しかったのかなと思う。ちなみに、お父さん側は特に問題なく了承してくれた。

ほどなくして台中に転勤になり、そこで子どもが生まれた。妻は結婚してから駐在員の奥様同士の関係が密になりそこでかなり日本語が上達した。子どもは日本と台湾のどちらで成人するかわからなかったのも、両方話せるようにとは考えていた⁷。ただ生まれた時から家では母親とも日本語で話すようにしていたせいもあって、中国語が弱かったのも、地元の幼稚園に入れることに。幼稚園に入ったら今度はどんどん中国語が強くなっていった。自分が教えられるのだからうけども、やっぱり仕事もあるし、時期によっては相当多忙で、起きている子どもの顔を見られないような時もあったのでなかなか難しかった⁸。そんなこともあって日本語は家で漫画や本、ビデオ、たまに私と話すくらい。小学校も現地校に入ったが、そのころ帰任命令が。妻は初め日本で暮らせることに喜んでいたが、少し田舎だったこともあってか友人もできにくく、最終的には嫌になってしまった。日本にいた間はほぼすべて日本語だったが、母親とは北京語で話すようになってしまった。それと台湾に一時的に戻った際には北京語だけでなく台湾語も。

⁶ 台湾社会で日本人男性は「大男人主義」と呼ばれることが多い。妻が友人から「日本人男性は大男人主義だが大丈夫か？」と聞かれた、という話は何度も聞いた。「大男人主義」は一般に男性優位思想と理解されることが多いが、一部には男性が家族の庇護者としての役割を果たすべき、という「大黒柱」と重なる概念も含んでいるという。

⁷ 言語教育は子どもが生まれた当初からの重要な関心事である。どのような言葉に身を着けることになるかが子どもの人生に影響を与えると信じられており、家庭内での日本語と中国語の存在を前提に、まずは日中バイリンガルを目指すというのが一般的であった。

⁸ 「父親が家族を経済的に支えるべき」という考えが、ほぼ全てのインタビューで自明のこととして語られた。父親たちはこの「大黒柱」であることを最重要役割として認識していた。

3 年くらいしたところに、台湾の友人が起業することに。やっていけるか迷ったが台湾に戻れるということで参加することに。奥さんは大喜び。

日本人学校

子どもは日本になれていた期間が長かったからか全く台湾の学校に行きたがらず日本人学校へ。おおむね気に入っているようで安心した。ただ、転校したところ他の「ハーフ」の子が日本語と中国語の間でうまく表現できず苦しんでいる様子をからかわれていたのを見てびっくりしたらしい。とても残念。その子とはハーフの子同士ということもあって仲良くなったが、箸の持ち方が気になったので指摘したことがあったそう。私もそう思うが、うちの子もマナーに関しては日本式にしておくとか台湾では「マナーが良い」と思われることが多いので得をすると考えているようだ。いずれにしてもハーフの子にも色々いるというのを感じた事件だった。

先生は日本人学校の環境は「日本と同じ」というのをよく言っている⁹が、実際には違うのでこの辺りの配慮が少し足りないのかなと感じた。特に先生は数年で帰ってしまうので、経験を積んでわかってきた頃に帰国する。後任にちゃんと伝わっていないのではないかなと思う。ただ、おかげで日本語は完璧。その代わり中国語は話せるが、読み書きはかなり苦手。

ざっくり言って日本人父で台湾人母の場合には、メインは日本語と考える人が多いと思う。うちが日本人学校に行かせたのもそういう側面があると思う。お母さんの場合にはやっぱり台湾に嫁に入るっていう意識があるんじゃないかな。その分お父さんが日本人の方が日本に対する思いが強いのかも。そもそも日本人学校に行かせないと、日本語がちゃんとできるようになるのは無理。ただお母さんが日本人の場合は現地校でも日本語ができる子が多い¹⁰とも思う。でもお母さんが中国語ができると家でも中国語になって、「日本語はちょっと話せますよ」程度になる人も多い気がする。どのレベルでもバランスはやっぱり難しい。

子どものこれから

日本人学校は中学校まで¹¹なので、高校は日本の実家から通うのを考えている。実は今の自分の仕事は日本にはもうほとんどなくなっているの、帰国して働くのはちょっと考えにくい¹²。全部海外に出ちゃってるんですよ。なので子どもだけ日本という形になると思う。一応、台湾の高校で日本人学校の卒業生を受け入れてくれるところもあるけど、やはり中国語が大変らしい。そこまでいい思いもさせたくないし、幸い両親も健在なので。全寮制の学校に行かせるつもりという知り合いもいるが、経済的な負担が相当になりそうなので考えていない。むしろ高齢の両親といっしょに住んでくれるとちょっと安心な面もある。おそらく大学も日本になるだろう。台湾には留学(?)できてくれればいいのか。そのために台湾の国籍はちゃんと残しとこう¹³とは思。

台湾は本当に親日的で、日本人というだけでよくしてもらえることが多い。昔はカフェとかで日本語で話していると地元の人に話しかけられることもよくあった。そんなこともあって日本をベースに台湾に来る人のほうがいいんじゃないかなと思う。自分の仕事もそう。日本から技術指導のような形で来ているし。私は中国語で苦労したが、息子は日本人にしては相当中国語ができるので(笑)

⁹ 芝野 (2014) は、このような教員の語りの背後にある葛藤をグアムの日本人学校を舞台に活写している。また日本人学校の課題の全体像については佐藤 (2019) が詳しい。

¹⁰ 「母親が日本人の場合には子どもの日本語は上達しやすい」というのは、一見、性別が決め手になっているようにも聞こえる。しかし、その理由を問うと「母親の方が子どもと乳幼児期から接する時間が長くその間に日本語の基礎ができていく」というように特定言語で接する時間に言及されることがほとんどであった。

¹¹ 今回の調査では、日本人学校のある地域でも現地校に行かせている例は多く、その理由として、経済的な問題が語られることもあった。しかし、ほとんどの場合に自分が今後も台湾で居住していきたいということ、日本人学校が中学校までしかないことが語られた。

¹² 特に技術者の中には産業の変化によって日本での就業が難しくなっていると認識している人が多かった。

¹³ 基本的に当面は重国籍を保持し、成長した段階で選択するかどうかを含めて本人に決めてほしいという考えが一般的であった。また 2018 年に 60 年以上続いていた台湾の徴兵制が志願制へと移行した。実質 4 か月の軍事訓練の義務は残ったが、2 回に分けて参加することも可能になっているという。それまではこの負担を避けるために台湾籍を放棄することもあったというが、大学生生活の 2 回の夏休みに分けて行うことが一般的になりつつある。

（２）吉澤さん（47 歳）、12 歳男子、7 歳女子、日本語教師・学校経営

バックパッカー経由で台湾。「外国で生きるために日本語の先生。台湾好きだし、子育ては基本台湾式で OK」

台湾までの経緯

生まれも育ちも神奈川県横浜市。3 歳上の姉が一人。大学では英語を専攻したが、それは外国に行きたいという気持ちが強かったから。第二外国語では一応「ノリで」中国語を履修したがほとんど身についてはいなかった。大学を卒業して 2 年ほど、アルバイトでお金をためてはバックパッカーとしてアジアやヨーロッパを中心に旅行。いつも外国で暮らすにはどうすればいいのかを考えていた。そこで思いついたのが日本語教師。日本語教師養成校に入り、420 時間の課程を修了。仕事を探す段になって、養成校の就職担当の人に「台湾に行ってみては」といわれ、経験を積むためにとやってきた¹⁴。このとき 25 歳くらい。

日本語学校で働く

中国には旅行で行っていたが台湾は初めて。就職したのは台北だけでも数教室ある補修班（学習塾）。前任者の代わりに入ったので、あまり引き継ぎもなく、片言の中国語と日本語で日常の業務をこなしながら、日々の中国語を学んでいった。日本の養成校で学んだことは役立ったが、台湾人を教えることに特化、適応していく過程で先輩教師のアドバイスがとても役立った。一般に補習班の日本語の先生は 2 年から 4 年くらいでだいたいやめていく。帰国したり別の学校に行ったり。自分はそこで 5、6 年ほど経験を積み、教室を管理する教室長、中間管理職になった。ただ仕事は激増。特に現場の先生と社長との間で苦労した。

転職、結婚、現在の仕事

30 歳を超えたのを機に別の補習校に転職。妻にはこの補習校で出会った。日本留学後に教師をしている同僚だった。新しい補修班で二年間ほど働いた後、独立してフリーランスの日本語教師になった。結婚についても考えるようになったが、2 年ぐらいで社員時代の給料を超え軌道に乗ってきたので結婚することに¹⁵。どちら側の両親もすんなり結婚を認めてくれた。だいたい 32、3 歳のころ。ちなみに両親は台湾に結婚式と子どもが生まれたところに数回くらい来たのみ。嫌いなじゃないと思うけど、面倒なのかな。

現在は自分の学校を経営するようになった。最近では自分で教えることは減って、マネージメントの仕事が主になっている。寂しい気もしないわけではないけど、その分仕事の時間は融通が利かせやすく、この点はとてもありがたい。

出産から子育て

一人目の男の子が生まれたのは 35 歳のころ。はじめは子どもをバイリンガルに育てるぞ、と意気込んでましたね。自分は日本語で話しかけ、奥さんは中国語（北京語）で話しかけるようにした¹⁶。しかし、2 歳ころになっても日中どちらの言葉も出てこなかったのが、少し焦って中国語の割合を増やしてしまった。失敗しました。今考えると、そこで私が頑張って日本語ちゃんとやっとならば違ったのかなあ¹⁷と思う。ただ、4 歳くらいから夏休みに一か月ほど日本の実家に帰るよう

¹⁴ 金戸（2007）では、「なぜ台湾での日本人の職種は日本語教師に偏るのか」という問いを立て、当時の雇用実態と台湾の外国人就労政策から考察している。そこでは既に台湾人女性と結婚した日本人男性の求職者が増えていることが報告されている。A さんはこの時期よりも前ではあるが、当時の社会状況がうかがわれるだろう。

¹⁵ 今回対象となった方々は短くとも十数年の台湾在住者であった。期間が長くなる理由はさまざまであったが、台湾移住の当初から永住を覚悟してきているということはほとんどなく、「うまくいかなければ帰ればいいと思っていた」という。この「うまくいく」というのは、妻の実家との関係が含まれることもあったが、主に経済的に家族を支えることができるということに言い換えることができる。母親たちの場合には文化的に適応していくことが中心となっていたことが対照的であった。

¹⁶ ひとり親が一言語で話しかけるのがとても重要という考え方が広く普及していた。一般的に日本語によるバイリンガル教育に関する書籍や WEB 情報は日英バイリンガルの話が多く、日中バイリンガルについての情報は少ない。しかし、台北日本語授業校の WEB ページでも詳細かつ分かりやすくバイリンガル教育についての解説がされており住者に広く読まれていた。（台北日本語授業校 <https://www.tjss.org.tw/blank-26>）

¹⁷ 唯一のネイティブ資源として日本語教育を行うという事は重要な役割と認識されている。

にしている。近所に住んでいる姉の子どもがちょうど同じ年で一緒に遊ぶので、とてもありがたい。本人も楽しみにしているよう。あとごく最近からだけどうちの日本語学校の授業を週に一回ほど取らせてみてる。自分は教えてないけどやっぱりほかの子よりできるのがうれしいみたい。

ちなみに、奥さんとのおふたりの間の言語は出会った頃は日本語が主で、中国語が少なかったけど、徐々に自分の中国語が上達していった、現在はちゃんぽんで使っている。子どもが最近中国語ばかり話すようになってきた理由の一つなのかなとも思う。

結局、幼稚園、小学校も台湾の学校にした。小さいうちならまだ台湾と日本の学校の間を移るのは簡単¹⁸だけど、大きくなるとそうはいかない。特に日本人学校は高校がないので、それが問題。日本人学校を出てこちらの高校に進学したのはいいけど、ついて行けずに日本に家族で移住した人を知っている。自分は台湾の生活が気について日本にすぐに戻るつもりもないし、日本で今でのキャリアを生かせる仕事を探すのも難しい¹⁹。だから子どもたちも台湾で生きていくことになると思う。もちろん日本語ができたほうがいい。将来の仕事の幅も広がるだろうし²⁰。事情をよく知らない人には、「国際結婚だから子供はバイリンガルでしょ」「日本語の先生だから子供にも教えてるんでしょ」といわれるが、そんなに単純な話じゃないのになあ、といつも思う。

子どもの勉強について

普段の生活で使う言葉は、上の子はほぼ中国語のみ。日本語も大事だけど台湾で生きていくので結局やっぱり中国語は大事²¹。ただ、小学生になってからは台湾の学校の宿題の多さに驚き、あきれてもいる。最近は夜 10 時くらいまで泣きながらやっていることもある。もっと伸び伸びと育てほしいと感じるが、ここで育ていくので仕方ないことも思っている。実際に子どもの宿題をそばで見せてあげているのは主婦の奥さん²²で、自分が口をささむ余地はなく、挟むとケンカになってしまうようなので、その間には下の子と遊んでいる。

二人目は女の子。下の子は少し頑張った。幼稚園も日本語で教えるところも検討したが、その学校が入学前後で閉校になることになったので、結局普通の台湾の幼稚園にいくことに。下の子は小学校に入った現在も私に対してはしっかり日本語で話す。お兄ちゃんが宿題をやっている間に私と日本語を使いながら遊ぶこともあり、日本語と接する時間が長いからかも。読み書きも漫画を読んだりして勉強している。

子どもたちのこれから

どちらの子どもにも日本語はできるようになってほしい。でも、教え込むようなことはしたくない。反発心を招きそうなので。子どもたちの中に日本を好きな気持ちを育ててあげたい。それがあれば自分が学びたくなった時にしっかり学ぶことができるだろうから。この辺が現実的なのかなあ。上の子どもは学校でもいろいろ言われることもあるのか、日本と台湾のことがだいぶわかるようになってきている。機嫌のいいときは私に日本語で話しかけてきたりすることもある。下の子はまだそのあたりはよくわかってないみたい。でも二人とも日本に夏休みに行くことを楽しみにしている。この点では良かったと思うし満足もしている。

日本と台湾の関係はとても良いと思う。自分も台湾好きだし。じゃないとこんなに長いこないよね。今後もこれが続いてほしい。ただ、日本人に対して理想化しすぎたイメージが流布しているのも感じる。そこまでじゃないよ、と思いつつも悪い気はしない。日本の人も頑張っていくべきだろう。

¹⁸ 台湾滞在が長期化していく理由が「蓄積していく」感覚を覚えるのは、子どもの台湾での成長の様子を語る時と、仕事上のキャリアについて語る時であった。

¹⁹ 台湾で仕事の経験を積んでいくと、その分野で「稼ぐ力」が台湾での働き方に最適化されていく。その程度が高まるにつれ、日本での仕事との距離が生まれていくと考えられる。

²⁰ アイデンティティの関連だけでなく、「日本語ができると将来いい仕事につきやすい」という投資的な理解が示されることも多かった。日本語能力検定で N1 があれば、給与が 10 から 20% 程度高い仕事に就く機会が増えるという。

²¹ 全ての家庭で中国語は台湾社会での主流言語としての有用性が当然視され、現地校に通えば自然と身につくと考えられていた。

²² 台湾でも子育てでジェンダーをめぐるには変化の渦中にある（宮崎 2014）。しかし一般的に台湾社会では共働きが多いと理解されており、概して子どもが乳幼児の間を除いて、妻が働くことに対して否定的な父親はいなかった。しかし、実際に台湾人妻がフルタイムの仕事についている家庭はごく僅かであった。

（３）河田さん（44 歳）、11 歳女子、5 歳男子、会社経営

私のワークライフバランス「時間が自由になるようにと思って自営業をしている」

台湾までの経緯

静岡県浜松市生まれ。弟が一人。小学校の時に両親が離婚。母に育てられた。いろいろ苦勞もあったが大学に進学。ただ大学時代には行き場所もなく、たまり場になっていた留学生の部屋に出入りしていた。当時は中国と台湾、台湾とタイの違いも良くわからなかったが、そこで留学生の話聞くのがとても刺激的だった。国が違うといろいろなことが違うな、というのを実感した。そこに台湾から留学に来ていたのが今の妻。彼女は卒業後に帰国して就職することになっていた。自分は経営者になりたいという気持ちが強かったが修行という意味もあっていったん日本で就職。2 年間ほどたったある日、これで十分かなと思って、彼女に電話で「台湾に行くわ」、そしたら「いいね」。で、翌日辞表を書いてすぐに台湾に行くことにした。結婚もしていないし、ビザもないし。今思うとアホか馬鹿か。そういう自分でも就職させてもらえる会社を探したところ、一社面接してくれた。就職したくらいですぐに結婚した。

台湾の家族と言葉とどもの個性

台湾にきたときには、中国語は全くできなかった。13 年たつが実は今も。コーヒー頼みだりではあるけど、交渉したりは全くできない。言葉を勉強しに来たわけじゃないし、ここで生活するために来た。言葉を勉強する気にはならなかった。義理の父は日本との仕事もあったみたいで、少し日本語が話せる。義理の母とは奥さん経由でしか話すことはない。ただ祖父母は日本語がとても上手で日本語で意思疎通できた。特に台湾に来た当初は、おじいさん世代が絶対という感覚が残っていた。お母さんお父さんへのお伺いを立てる前におじいさんおばあさんにお伺いを立てる。そこが日本語だったのでずいぶん助かった。

今は家族 4 人で暮らしているが家庭での言葉は、なるべく日本語と決めている。上の子は日系の幼稚園にいった。その時は日本語 7 で中国語・台湾語が 3 くらいかな。お父さんとは日本語。お母さんとも日本語を頑張ってたけど、やっぱり中国語が出てたと思う。今は、現地の小学校に入れてるけど、中国語をしっかりとやってほしいし、台湾語²³も一応ね。あとは英語²⁴。日本語はその後ですね。そんな感じで育った上の子も来年は中 1。生活上は 9 割中国語、1 割が日本語くらいかな。私は今も娘に日本語で話すようにしてる。なるべくわかりやすくかみ砕いて。で、たまに中国語で補足。聞いてわかるだけではなく、ちゃんと話せるようにはしたいから「じゃいまの日本語で言って」「家だから日本語で言って」などやるけど、反抗期も入ってきて（笑）「じゃあいいわ」となって話さなくなってくる。なるべく話すように仕向けているけど。結局、今は、話すのは大丈夫だけど、書くのは「あいうえお」も怪しい。何度やっても忘れちゃう感じ。

下の子はまだ幼稚園年長の来年小学校。言語の感覚がいい。現地の学校に入れても日本語ができるようになりそう。二つの言葉を学んでも理解している感じ。質問の仕方が、ちゃんとして。「これ何？」ではなく、「この赤くて点々のある入れ物なに？」「紙コップ」。「紙コップに入ってるこれ何？」「コーヒー」。みたいな感じ。言葉のセンスがあるみたい。

奥さんも日本語を勉強するのは当然のことと思っている。今はこのままでいいかなと思ってるけど、やっぱり日本語ができなくなるのは避けたい。日本のおじいちゃんと話せなくても困る。ただそこまでネイティブな日本語はできなくてもいいかとも思う。話せて読み書きが少しできてくくらいで。自分は言葉にあまり力を入れてこなかったので、唯一、言葉のことはもうちょっとやってくればよかったと思う。子どもには言葉で苦勞はしてほしくないと思う。やりたいといったらすぐ対応できる体制は作っておきたい。あとは、大学に入るときに日本に行くとかあれば、行けばいい。第二言語として日本語を入れておけばいいかなと思う。奥さんもそうだったし、理解している、はず。

²³ 台湾語（および客家語、原住民語）は、民族的アイデンティティの継承のため、および同じ民族グループの一員であることの明示のためのツールという意味が付されていた。

²⁴ 各家庭での英語重視の度合いは大変幅があった。ただ、この英語教育は「グローバルに活躍してもらうため」といった理由付けがされるものの、その実態は教科としての英語を学ぶということである場合がほとんどであった。

日本の学校、台湾の学校

こないだの休みに実家の近くの日本の小学校に3日ほど入れてもらった。数年前からお願いしていたが、前例がないということで断られてきたのに、今回急にOKになった。校長が変わったとかがあったみたいで。短くても日本の学校が経験できたのはとても良かった。日本も台湾もいいところあるけど、台湾はある意味すごく個人主義。例えば運動会。集合も緩く、個人の競技が終わったら三々五々帰宅する。自分の子どもに時間を使っているだけで、学校行事ではないよね。社会見学もそう。先生次第で行かないこともある。でも隣のクラスは行ってるかもしれない。うちの嫁も昔はこうじゃなかったって言ってる。運動会も日本みたいだったのが、この20年くらいで変わってきているらしい。台湾人の親もこの変化を認識しているが、自分に都合よくことが進められるので、文句を言わないのでは。一事が万事。掃除の仕方也不知道。雑巾の絞り方も知らない。勉強は良くするけど人間として生きていく知恵が全く身についていない。そういうのは家庭でやってくださいって。ほんと塾ですね。

子どもたちは、学校で奥さんの姓を使ってるけど名は日本風²⁵で珍しいから「日本人だ、日本人だ」とからかわれることもあるみたい。台湾の歴史では日本に支配された、日本は加害者であるっていう教育は避けられない。知り合いではその問題でつらくなって日本に帰った人もいる。子どもも一時期いろいろ言ってたけど、いろいろな人と話して心境の変化があったみたい。最近はどう言わなくなった。

日本と台湾

日本と台湾の関係は他の国との関係を超えている。外国に住んでいるにもかかわらず外国に住んでいる気がしない。そういうことを感じさせてくれる。うまく言えないけど日本人が日本人のままでいい。気持ち的に締め付けられることがない。台湾がとても楽に生活をさせてくれる感じがな。子どもたちには二つの国を持っていることをもっと誇りに思ってもらいたい。両国の関係はいいし、それぞれもいい国。

台湾では外国人に白人とアジア人、それに加えて日本人の三つのグループがあるみたいに感じる。白人への接し方は緩やかに受け入れが進んでいるけど、日本人は大きく変わっている。昔は日本人というだけで大切にされたけど、最近は日本人が当たり前になりすぎて。日本人の方にも横柄な人がいたりして。観光客とかも。昔の人が日本人が住みやすいようにしてくれたのに最近はそのが変わってきている。韓国ブームもあるかも。その分日本への関心が減っている。ただ仕事を通じても全体的に日本のクオリティが下がっている印象もある。

子どもたちのこれから

台湾で暮らすにあたって、子どものことが一番にある。家族があるから仕事ができる。仕事があるから家族があるというのとは違う。自営業なもの自由にも子どもに時間を使える。子どもを育てる環境を大人は一番に考えなければいけない²⁶、というのがあった。自分の親が離婚したのも関係があるのかもしれない。子どもとは学校にいる時間以外はいっしょにいる。一緒に事務所で時間すごしたり。学校帰りにおじいさんの家に行ったりもする²⁷けど。私も台湾がベースなので、日本に帰って仕事するというのは今の段階ではない。でも家族に問題があれば、こちらの仕事を任せて日本に行くというのも全然大丈夫。それができないとダメなんじゃないかとも思う。

²⁵ 子どもの名前は名付け当時の思いが象徴的に表れており、エピソードが尽きなかった。名前には①二つの姓名（全く別の日本の姓名と中国の姓名）、②日本名のみ、③二つの姓（日本の姓と中国の姓）と一つの名（漢字が同一、さらに読みもほぼ同一という例も多かった）の3パターンがあった。

²⁶ 台湾在住の父親たちにも、日本で話題になることが多い「イクメン」言説は共有されている。「自分たちの親世代とは異なり、子育てに積極的に参加することは重要な役割だ」と認識されていた。さらには「子育て自体が好きで、やりたからやる」と語る父親もいた。

²⁷ 居住の形態が核家族であっても、母親側の祖父母が子育てに参加するという話は大変よく聞いた。乳幼児期には平日完全に祖父母宅に預けてしまい週末のみ子どもと過ごすという例もあったが、多くの場合には祖父母が自宅に出向いてくるというパターンであった。小学生になると、学校や塾の帰りに祖父母宅にゆき、夕飯を食べ終わるころに迎えに行くというケースもあった。ただし、信頼できる手として大変重宝するという話の一方で、子育てについての考え方が世代間で異なるという話もよく出てきた。特に、祖父母の個人的な経験を基礎にした考え方と、父母世代の本やインターネットで流通している「科学的」な考え方がぶつかるのだという。台湾における子育て、特に労働との関係や様々な形の育児のサポートについては斧出・藤田（2007）に詳しい。

5. 調査からみえてきた論点

ここまで実験的な方法でインタビューの結果を示してきたが、以下に5つの論点をまとめていきたい。これらの論点に対する各人の位置取りは多様であったが、これらの点についてどう考えているかを問うことで各人の特徴を理解する手掛かりとなるだろう。

5.1. 「日本人父親」性を構成する要素

5.1.1. 「大黒柱」と「イクメン」

本研究が注目したのは「日本人父親」である。インタビューからは、台湾で子育てする「日本人父親」性を理解する手がかりとして、性別役割分担にかかわる具体的な要素として、伝統的な父親像である「大黒柱」、そして現代的な父親像としての「イクメン」というキーワードが表出してきた。これは日本在住の父親たちも感じている点であろう。しかし、台湾に住む日本人父親は、次のような特徴があった。

まず、父親たちは自分が経済的・精神的な家族の支柱、すなわち大黒柱として機能するべきだという考えを自明のものとしており、この大黒柱の特に経済的役割を効率的に果たすために自身の日本の資源を生かし、日本と台湾の間に立つ仕事をする場合が多かった。具体的には、日本語教師、日系企業の現地採用、台湾企業の日本顧客担当などである。その結果、日本的働き方が期待され、長時間労働にもつながりやすい傾向があった。しかも、自らが経済的な支柱となることが当然という考えを反映してか、母親たちの語りとは対照的に、結婚にあたって配偶者の家の経済状況を考慮したという語りは出てくることなく、台湾人妻の実家の経済状況は実に多様であった。今回インタビューした父親たちの中で、経済的に妻の収入を支柱とし、いわゆる主夫をしていたのは一例のみで、その他は全ての家庭で父親が主要な稼ぎ手であった。

一方、大黒柱の役割を引き受けたうえで、イクメン、つまり「子育て参加をより積極的にするべきである」という思いも強い。もちろん子育てに参加するべきと認識していることは、その役割期待に十分に応えられていることと同じではなく、むしろ、大黒柱であることと十分に子育て参加をすることは排他的な関係にあるとさえ認識されている場合も多かった。これが端的に表れてくるのが子どもへの日本語教育であった。

「日台家庭の父親の子育て参加」には、一般的な意味での「子育てにまつわる諸活動に主体的に関わる」という意味だけでなく、自らが「唯一の日本語ネイティブ」として子どもの日本語教育に責任を負っているという認識も含まれている。そのため、子どもの日本語力の発達が期待通りにいかない場合に、仕事が理由とはいえ必要な時間をさけていない、と自責の念にとらわれている例もあった。またそのような状況避けるために日本語教育を日本語の塾や日本人学校に「外注化」（渡辺他 2016）する例もあった。その一方で、自営業など仕事時間の管理が自分のできる人たちの中には、子どもにしっかりと日本語を教え、手ごたえを感じている人もいる。これらの人は子育て参加への自負心も強いが、それでも仕事よりも日本語教育を優先するという考えはほとんどみられない。そのためこのような態度は、大黒柱的役割がより中心的であり、イクメン的役割は付加的と考えられていることの表れと解釈できそうである。

いずれにしても、台湾に住む日本人父親たちには、経済的・精神的な支柱となる役割を引き受けた上で、日本語教育の責任を含む子育て参加が求められているという点で、国内の父親たちに比べても、大黒柱的役割とイクメン的役割の間で葛藤が生じやすくなっているとみてよいだろう。

5.1.2. 妻の就業

共働きが多いとされる台湾社会だが、インタビューの対象となった父親たちの台湾人妻の多くが専業主婦だった。専業主婦の状況を見た妻の友人が「日本人の夫が『大男主義』で外出を制限しているのでは」と心配してくることも多いという。この状況への夫たちの説明は「台湾の伝統的に裕福な家の奥様は働きに出ない」こと、「妻の意思を尊重した結果、働かないという選択した」などとされることが多かった。また、この説明は自身の「稼ぎ」によってその選択が可能になっているという自負心とともに語られることもあった。つまり「妻は働かないことを選べる自由さがあり、二人の話し合いの結果として妻の意思を尊重して子どもが小さい今は働いていない状態にある」といった説明は大黒柱としての役割を十分に果たしているのだという訴えとも

解釈できる。ただし、このような傾向は必ずしも台湾独特というわけではなく、他国の在外父親たちにも共通する視点であったことは指摘したい（渡辺他 2015, 渡辺他 2016, 渡辺他 2019）。

これに対して、台湾人夫を持つ日本人妻も労働参加率が低い印象を受けた。今回の調査の限界としていわゆる母集団の傾向を語ることはできないが、日本人妻たちについても様々な知見を得ることができた。出会いから結婚までの過程で相手家庭の経済状況を冷静に吟味していること、現地語能力不足により就業機会の制限をうけている場合があること、3歳までは母親が育児をするべきという「3歳神話」の存在などの側面もみえてきた。また、韓国に居住する日本人妻の研究（渡辺他 2015）でも見られたように、高い教育訓練を受け一定の就業経験もありながら夫の国で主婦をせざるを得なくなっている日本人妻たちが、自分の能力を自由に発揮し自己実現できる場として子育てや互助のグループなどを運営するという姿も観察できた。

5.2. 言語教育を理解する手がかり

5.2.1. 各言語の意味付け

言語教育は国際結婚家庭にとって子どもが生まれた当初からの重要な関心事であり、子どもの教育を語る際の象徴的な事項でもある。インタビューで具体的に言及された言語は多様で、中国語（北京語/台湾華語/国語）、日本語、台湾語（ミンナン語）、客家語、原住民語²⁸、英語などがあった。それぞれの言語には異なる意味が与えられており、それがその言語の教育のあり方にも直結していた。

全ての家庭で中国語は台湾社会の主流言語として必須であり積極的に学ぶべき言語とされていた。そして台湾の学校教育は子どもに求められる勉強が質量ともに日本に比べて多く教育競争の否定的な影響が懸念されるものの、現地校に通えば中国語は自然と身につくと考えられていた。

日本語は、民族的アイデンティティの象徴という意味付けに加えて、将来への投資、そして保険といった意味も持たされていた。子どもの将来の経済活動の可能性を広げる「人的資本蓄積のための投資」（ベッカー 1976）という側面としては、「日本語ができれば将来給料の良い仕事につける」という理解が典型であろう。タイやフィリピンほど給与の額が大幅に変わることはないようだが（渡辺他 2019）、台湾でも新卒で2割程度の差が出ることがあり、就職の機会が増えるということは意識されている。一方、保険という側面としては、「日本語ができれば日本の学校への転校・進学が可能になる」という考え方があった。台湾の教育競争に批判的な人たちにとっては、台湾式の教育からのエスケープルートを確認できるという点が認識されていた。ただし、日本語の教育は決して簡単ではなく、乳幼児の時期からしっかりと日本語環境を作ること、学齢期以降は家庭だけでなく、日本人学校や日本語授業校、塾など外部の資源を使って意識的に教えなければ十分な日本語力はつかないと考えられていた。

台湾語（および客家語、原住民語）は、それぞれの民族的アイデンティティの継承のため、および同じ民族語を話すグループの一員であることを明示できるツールという意味が付けされていた。これを示すように、台湾語学習の理由には「おじいちゃんおばあちゃんと話すのに」、「やっぱり台湾語できるとぐっと距離が近づいて、待遇が良くなることがあるみたいですよ。特に南部ではまだまだ圧倒的に生きた言葉ですから」などがあげられていた。ただし、このように民族語の有用性はよく理解されている一方で、これらの言語の教育という点では、意識的な学習までは必要ではなく、祖父母や友人との会話、学校でのわずかな授業を通して身に付けられる範囲で十分と語られることが多かった。

英語の教育が台湾社会で大変重視されているということに異論はないようであったが、各家庭での重視の度合いには大変な幅があった。また、英語教育は「グローバルに活躍してもらうため」といった理由付けがされているものの、その実態は韓国や中国での英語教育の様子と似ており（渡辺他 2016）、教科としての英語を学ぶということである場合がほとんどであった。タイやフィリピンのように英語を使うことで、外資企業に雇用されたり海外に移住したりと外国と直接つながれるようになる（渡辺他 2019）ことまでが意識されていることはまれであった。

²⁸ 日本では「先住民」という用語が使われるが、台湾では「原住民」が使われ、日本における台湾研究でも「原住民」という用語が一般的であるため本稿もその慣習に従う。

5.2.2. 家庭内言語について

各言語の意味付けの他に、家庭内の言語事情も言語教育を考える手掛かりとなる。河原(2009)は①居住地の言語、②世界における当該言語の話者数、③当該言語話者全体が構成する経済圏の規模、④夫婦どちらがより経済力があるか、⑤夫婦間での年長者、⑥事前学習の有無(結婚以前の語学学習の状況)の6項目をあげている。これらに加えて、インタビューでは将来の居住希望地、家族の言語学習・教育意欲、自身の言語学習経験に対する評価、社会における日本語の威信などをどう理解しているのかもかかわっているようであった。

インタビューの際によく言及されたのは出会いの場が日本、台湾、第三国かによって、家庭内の支配的言語が一定程度パターン化されるという話だ。特に日本と台湾の二国間の人の動きから結婚につながった事例については理解しやすい。日本留学中の台湾人と出会って結婚した場合には、その後台湾に移住しても家庭内の言語は日本語になりやすく、日本語教育に積極的な雰囲気もできやすい。これに対して、台湾で留学や仕事をしている時に会った台湾人と結婚した場合には、本人は中国語ができることが多い一方、配偶者は全く日本語ができないという場合もあるため、中国語が家庭内の言語になりやすく、日本語を維持するために必要な努力もより大きくなりがちだ。出会いに至る移動の理由がその国への興味関心に基づく場合には家庭内言語としてもその国の言葉が選択されやすいと解釈できる。実感としても河原のいう項目などに対する各家庭の回答を推測しやすい。ただし、河原の枠組みは夫婦それぞれ言語の二言語のみを前提としていることは指摘しなければならないだろう。

一方、近年は第三国で出会い国際結婚後の居住国として台湾を選ぶケースが増えている(金戸2007, 谷口2013)。このような現象は韓国やタイでも見られた事例であり、第三国からは男性側の国に移動することが多かった(渡辺他2015, 渡辺・久保2018)。今回の対象者でも第三国で出会ったケースは日本人妻に多かったが、このケースの家庭内言語のあり方はより複雑であった。一定の理念に従って、家庭で使われる言語を意識的に決定し、それを維持していく場合もあれば、当初は第三国の言葉である英語で話していたものの、日本人配偶者側の中国語が上達するにたがって、家族全員が中国語で話すようになる場合もある。家庭言語が時期によって変化していく場合もあることには注意が必要だ。

5.2.3. 子どもの名前の言語について

子どもは成長過程で経験する場で培われた人間関係の中で自己理解を形成していく。象徴的なのは「どんな名前で呼ばれるのか」であろう。何語を基礎にした名前では社会生活を送るのかは、周囲の人がどのようにその子どもを認識するのかに直接的に影響するため、子どもの成長に与える影響は大きい。インタビューでは名付けに大きく三つのパターンがあった²⁹。①二つの姓名(全く異なる日本の姓名と中国の姓名)、②日本名のみ、③二つの姓(日本の姓と中国の姓)と一つの名(漢字が同一、さらに読みもほぼ同一という例もあった)である。

①のように二つの姓名を使い分ける場合には、例えば現地校の社会では中国名、週末の日本語授業校では日本名というように、交流する相手に合わせて名前を選択的に使っていた。それに対して②のように、日本名のみの場合には、日本人学校に通学する場合には大きな問題となることは少ないが、現地校に通学する場合には様々なことが起こり得る。日本語能力のあり方にかかわらず、周囲からは「日本人」として意識されながら育っていくことが本人の自己理解に影響するであろうことは想像に難くない。ある大学教員の方からは、「日本名を名乗って台湾で社会生活をしながらも、日本語があまりできない学生に会うことも多々あるが、総じてあまり自尊心が高くなく感じた」という、その理由はやはり「『日本人』なのに日本語があまりできない」ことにあるのではないかという解釈が示された。③は名づけ上の工夫の一つであるが、名前の響きによって①と②の両方の側面がみられるような状況であった。

²⁹ これらに加えて、英語名を使うという例があった。早い場合には幼稚園から、家族、友人、先生からも英語名で呼ばれているという。英語名は、日本名や中国名の音に似たアングロサクソン風の名が使われることが多いが、芸能人やアニメのキャラクターなどからとる場合もある。いずれにしても現地校で日本名を名のことで生起する緊張感が英語名によって作り出される曖昧性によって変化するであろうことは推測できる。「名前」の複雑さを示す好例であろう。

5.3. 蓄積していく在台湾の理由

多くの父親は当初から永住を覚悟して台湾に渡ったわけではなかった。この点は母親が「台湾に嫁ぐ」といった思いで台湾に移住することがあるのとは対照的である。それにもかかわらず台湾在住が長期化していく過程からは、「理由が蓄積していく」といった印象を受ける。つまり一つの理由で決定されるのではなく、複数の理由の影響が徐々に変化しそれが台湾での滞在長期化へとつながっているようにみえる。

例えば台湾で経済的にやっていけるという自信は大きい。しかしそこに至るまでの過程や達成以降の経験は、「稼ぐ力」の台湾への最適化を伴っていた。これには注意が必要で、台湾で仕事のキャリア経験を積んでいくことが日本での再就業に不利に働いてしまう場合も多い。台湾で仕事を続けていくうちに、その分野の中国語に堪能になり、その仕事の人脈が広がっていき、日台の社会構造と産業の変化に対応していく形で経験を積んでいくことで、彼らの「稼ぐ力」が台湾での働き方に最適化されていく。その程度が高まれば高まるほど日本での就業が難しくなるという関係にある。この過程は一家の大黒柱であり続けることと合わさって、台湾に滞在する理由が蓄積していくかのようにみえる。日台の世帯所得はほぼ同程度となっている³⁰。日本への再移住による経済的な利益は少なくなってきたおり、これも台湾滞在选择を要因の一つとなっている。

子どもの成長も大きな要因になる。小学校低学年くらいまでなら日本と台湾の間を移動するのはそれほど大きな問題ではないと考えられている。しかし学年が上がるごとに使用言語の複雑性や学習単元の違いが大きくなるため中学生になると教育システムの間を移動するのはかなりの覚悟と努力が必要となる。これが日本人学校が中学校までしかないという問題と合わさって、小学校低学年の時点までにほぼその後の教育システムの選択を迫られる。

台湾滞在の長期化は、これらの要因を考慮しながら、自分と子ども、配偶者のバランスを取り続けてきたことが、結果として現在の生活につながっていると考えてよいだろう。

5.4. 台湾社会の理解：これまでの調査との関係から

今回の調査に先立って中国、韓国、タイ、フィリピンで同様の調査を行った（渡辺 2014, 渡辺他 2016, 渡辺・久保 2018, 渡辺他 2019）。抽象度を高めていけば全て人のなすことは同じということになるだろうが、国ごとの違いが感じられる部分もあった。ここでは対日感情、少子高齢化、公教育への信頼の三点について言及したい。

まず、対日感情は対比の重要な観点となる。今回のインタビューではすべての人が台湾の人々の日本に対するあたたかい態度を指摘していた。他の国々でも日本に対して親和的な感情を持っている人との出会いが話題になることはあったが、台湾での程度は群を抜いている。台湾の人々の「親日的態度」については多くの分析がなされている。例えば金戸（2007）は、背景に日本のメディアが作ってきた台湾のイメージとポストコロニアルの要素が日本人にとっての台湾の居心地の良さを構成していると指摘する。確かに近年日本の存在感が強まっているタイでもメディアの作るイメージや実際の日本の商品の流通は大きな影響を与えていそう（久保他 2019）。しかし日タイ関係は日台の関係に比べてポストコロニアル的な関係が与える程度が著しく異なる。

今回のインタビューでは配偶者の祖父母である日本語世代との交流も頻繁に言及された。韓国や中国ではコロニアル時代の日本との関係が現在の国際関係にしばしば否定的な影響を与えており、在住者が日々の生活の中で緊張を強いられることもあるのとは大きな違いだ（渡辺他 2016）。このように他国も含めた枠組みで考えると日台関係の特殊性が際立つ。

また他国との比較という点では、少子化も視野に入れておくべきだろう。2017年の合計特殊出生率は、日本が1.43であったのに対し、台湾1.25、韓国1.05、タイ1.53、中国1.68、フィリピン2.64であった³¹。日本では少子化が広く認識されてから一定の期間が経過しているが、他国では相対的にその期間が短い。しかし台湾では2010年に0.895を記録してから大きく社会的な雰囲気が変わったという。人口減少という局面は国の移民政策にも影響を与える。単に外国からの労働

³⁰ 厚生労働省（厚生労働省 2019）によれば、2017年の一世帯当たりの平均所得金額は551.6万円。これに対して日本台湾交流協会（公益財団法人日本台湾交流協会 2018）によると同じく2017年の一世帯当たりの年間所得は台湾全体で123.1万円（2017年10月1日のレートで約455万円）、台北市では164.8万円（同じく609万円）である。

³¹ 台湾は（内政部統計處 2019）、そのほかは世界銀行（World 2020）による。

者や結婚移住者を受け入れる意向が高まるだけでなく、韓国のように二重国籍者の容認への動きも高まることが予想される（宣 2019）。台湾が想定する移民の出身国は日本や韓国が想定する国々と重なる。中華民国の国際的位置付けも大きくかわかる点ではあるが、今後の動向は国際的な関係の中で理解する必要があるだろう。

現地の公教育に対する信頼も重要な点だ。今回の台湾の調査では、在住日本人たちが現地公立校の教育に一定程度以上の信頼を置いていることが感じられた。これまでの調査ではタイやフィリピンで現地校公立校の教育への強い不信から、私学、日本人学校、インターナショナルスクールに通学させるという話を頻繁に聞いた。しかし、台湾では教育競争とその弊害への懸念は頻繁に語られたが、結局現地公立校を選んでいる家庭が多かった。この傾向は韓国や中国とも共通しており、現地校の教育水準への一定の信頼だけでなく、正規の学校以外の日本語授業校などを含めた教育機会が全体として子どもへの教育期待を満たしている」と解釈できるだろう。

5.5. 未来にみえていること

今回のインタビューでは、先述したように主に過去から現在までの話を聞く中で、子どもの教育についての考えを聞いてきた。その中で子どもの将来についても話題になった。ほとんどの親が大学までの教育を希望しており、その場所は「本人が決めればよい」とし、台湾、日本、主に英語圏を想定した第三国があげられていた。さらに、そのために今できることは言語的な訓練と興味関心を伸ばしてやること、そして資金的に支えられるように準備しておくことなどが語られた。

ただし、自身の将来を語るにあたっては、これまで築いてきたキャリアを生かして台湾で生活したいという意見がほとんどで、近い将来に日本に拠点を移したいという考えを持っている人はごく僅かであった。しかし、例外的に、親の介護という問題は帰国を迫られるかもしれない事項としてあげられた。また実際に一時期親の介護のために台湾と日本を行き来したり、一時的に台湾に呼び寄せたりということを経験していた人もいた。特に日本に兄弟姉妹がいない場合にはその思いは強い。台湾でも高齢者介護は社会問題となっているが、日本にいる親と台湾人配偶者の親の介護、見取り、相続、墓といった問題は、その他の事情にかかわらず避けられない問題として現実化してくることが予想される。自らの老い、配偶者の老いも将来の問題として「考えないようにしている」というのが現状で、将来的な対処方法を語ってもらったが手詰まり感を覚えた。

また、台湾の国際的位置付けについても将来に不透明感を持つ要因としてあげられることが多かった。これは特に中華人民共和国との関係の中で、台湾の人々が持つ様々な思いに外国人としてどの程度踏み込んでよいのか、子どもたちにどのように考えてほしいのか、という2点に集約できる。これに対しては、政治的に一定の距離を持って現状維持を支持するという考えが一般的であった。

6. おわりに

インタビューとフィールドワークを中心とする調査の結果、教育観の前提として父親たちが、あるべき父親像としての「大黒柱」と「イクメン」との間で葛藤を抱えていることが見て取れた。全体として、「大黒柱」であることは「イクメン」であることより重要であると考えられていたが、両者の関係は複雑であった。「大黒柱」として機能するためには台湾と日本の間に立つ仕事を選ばれやすいこと、「大黒柱」として台湾でキャリアを積んでいくことは自身が台湾社会の日本人という役割に最適化していくことも意味し、他国への再移住が容易ではなくなっていくこともわかった。

一方、「イクメン」には一般的な子育てへの主体的参加だけではなく、唯一の日本語ネイティブとして子どもの日本語教育についての責任を負うことも含まれており、子どもが期待する水準の日本語力を身に着けられない場合には、十分に「イクメン」をできていないとして、自責の念を覚える場合があることもわかった。また、これらを支える形で台湾の親日的雰囲気もあり、結果として台湾社会を選好する気持ちが強まっていくことなども観察できた。

このような状況を前提に、父親たちは台湾で子どもが育つことを受け入れたうえで、日本的な教育をどのように行うのかを課題としていた。そして、各家庭の考えを象徴的に表すのが言語教

育であった。各言語に異なる意味付けがされた上で、家庭内の言語の決定や各言語の教育についての決定が行われ、その教育のプロセスで家庭の現実や将来の選択肢が絞られていくという関係にある。

なかでも学校の選択は重要な指標である。現地校の教育競争には概して懐疑的な一方で、一定程度の水準にあるという理解もある。それに対して、日本人学校は日本的な教育をするには理想的とされることもあるが、高校の部がないため、どこかの段階で日本への「帰国」を考慮することになる。帰国は、「稼ぐ力」が台湾社会に最適化されている程度の高い父親たちにとっては現実的な選択肢ではない。そのためこのような家庭では、現地校を選択し、付加的に日本語を教えていくという選択になりやすい。逆に日台間の貿易などを扱う自営業や日本でも仕事を見つけやすい技術者などは日本への帰国も考慮しやすくなっている。このような形で、「大黒柱」であることと子どもの教育はつながっているとみてよいだろう。

以上のような解釈は、すべての父親がここで示したような考えを持っていたというようなものではなく、本稿で示した論点について各人の考えを問うことで、それぞれの父親の特徴を浮き彫りにすることができる枠組みと理解できる。その上であえて父親の全体に共通している点をあげれば、「標準」からの逸脱に寛容ということが言えるだろうか。現代社会では個人の生き方の多様化が進み標準のあり方も変わりつつある。しかし、国際結婚は日本台湾両国で一定数あるものの非標準であり、この決断とつながった人生の中で、子どもの教育を考えている。彼らが子どもの教育も非標準であつてもよいという柔軟な考えを持つ一因ではないだろうか。

本研究では、台湾における国際結婚家庭の状況や父親たちの教育観の現代的な特徴を探った。手法的な限界として、問いに答えてこれまでの人生を振り返って話をするという形式のため、語る過程で現在の視点から新たに経験が再構成されていくことや、結果として台湾を去った人にはインタビューできていないことなどがある。また、母集団の全体像を知ることできない。しかし本研究の知見は、これまでに研究の蓄積がほとんどなかった台湾で子育てする日本人父親たちの生き方の様相を考える手掛かりにはなるだろう。今後は本研究のような移動した側の語りと配偶者側の語りと対比することでより立体的な理解を目指すことを課題としたい。

謝辞

今回の調査は大変多くの方々のご厚意によって行うことができました。台湾の外交部による台湾奨助金の実務を取り仕切る国家図書館の漢学研究中心のスタッフ、セミナーの講師としてだけでなく個人的にもご助言をくださった城青汝先生、受け入れを頂いた相模女子大学の提携校でもある文藻外語大学の欧亜語文學院の前学院長張守慧先生、現学院長の董莊敬先生には台湾で研究する上での様々な便宜を図っていただきました。日本語学科の小堀和彦先生には多くの人をご紹介いただき、また長時間にわたって研究上の議論にお付き合いいただきました。国立高雄餐旅大学の黄女玲先生、中山医科大学の林思敏先生には学生に話す機会を与えていただきました。この講演は考えをまとめるのにとっても良い機会でした。また国立暨南国際大学の楊武勲先生には公私ともに大変お世話になりました。しかし、何よりも本研究の中心であるインタビューに協力してくれた方々には心から感謝したいと思います。短くとも1時間、長い場合には4時間連続でお話いただくこともありました。皆さんの人生に触れることができたのは本当に光栄なことでした。インタビューの成果をまとめた本稿を届けるのが今から楽しみです。

本研究は、台湾外交部による2019年の台湾奨助金（Taiwan Fellowship）の助成を受けました。

参考文献

- 石井クント 昌子 (2013) 『「育メン」現象の社会学：育児・子育て参加への希望を叶えるために』 ミネルヴァ書房，320p
- 伊藤 佳代 (2015) 「台湾台日跨國婚姻の語言傳承教育策略-以日籍女性的語言意識形態分析為中心」 National Cheng Kung University Department of Taiwanese Literature.
- 斧田節子，藤田道代 (2007) 『台湾の育児。恵美子 落合，真理 山根，靖子 宮坂編。アジアの家族とジェンダー』 勁草書房，p.143-59.

- 片山 怜 (2015)『異文化に暮らす日本人妻の適応と社会的ネットワークの意義——台湾なでしこ会を事例として——』『西南学院大学大学院研究論集』Vol.1, p.171-80.
- 金戸 幸子 (2007)『現代日本人の台湾への自発的移住に関する研究—移住経験の聞き取り調査とその分析を中心として—』財団法人交流協会, p.1-27.
- 金戸 幸子 (2009)『日本人の越境するライフスタイルにみる現代日本をめぐる“もうひとつの”多文化化』『多言語多文化実践と研究』Vol. 2, 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター, p.138-165.
- 河原 俊昭 (2009)『国際結婚の言語を考える』河原 俊昭, 岡戸 浩子編『国際結婚：多言語化する家族とアイデンティティ』明石書店, p.276-309.
- 河原 俊昭, 岡戸 浩子 (2009)『国際結婚：多言語化する家族とアイデンティティ』明石書店, 317p
- 久保 康彦, 渡辺 幸倫, 鈴木 涼太郎, 中西 大輔, 井口 詩織 (2019)『買い物弱者とネット通販：在外子育て家庭調査からの示唆』くんぶる, 174p.
- 蔵本 真紀子 (2017)『異文化間夫婦に関する文献レビューとこれからの展望』『青山学院大学教育人間科学部紀要』Vol. 8, p.91-107.
- 黄 琬茜 (2014)『「新台湾之子」を育てる『外籍』の母親に関する心理学的研究：インタビューを通して』『評論・社会科学』Vol. 107, 同志社大学社会科学会, p.75-93.
- 公益財団法人日本台湾交流協会 (2018)『2018 台湾の経済 Data Book』日本台湾交流協会, 122p.
- 厚生労働省 (2019)『平成 30 年 国民生活基礎調査の概況』20p.
- 齋藤 大輔 (2017)『現代社会における越境移住の形態：タイ・バンコクの『現地採用』で働く日本人からの視座』『青山地球社会共生論集』Vol. 2, 青山学院大学地球社会共生学会, p.169-85.
- 佐竹 眞明, 金 愛慶 (2017)『国際結婚と多文化共生：多文化家族の支援にむけて』明石書店, 315p.
- 佐藤 郁衛 (2019)『特集研究論文 日本人学校におけるグローバル人材育成の課題』『国際理解教育』Vol. 25, p.47-56.
- 佐藤 真知子 (1993)『新・海外定住時代：オーストラリアの日本人』新潮社, 217p.
- 施 昭雄, 陳 俊良, 許 詩屏, 桂田 愛 (2007)『中国大陆及び東南アジアの外国籍配偶者移民の背景から考察する『新台湾之子』の教育問題とその対策』『福岡大学研究部論集 A：人文科学編』Vol. 6, p.121-38.
- 芝野 淳一 (2014)『日本人学校教員の「日本らしさ」をめぐる実践と葛藤：——トランスナショナル化する在外教育施設を事例に——』『教育社会学研究』Vol. 95, 日本教育社会学会, p.111-30.
- スアルティニ ニ・ヌンガー (2014)『国際結婚における変化とライフスタイル移民の出現：インドネシア・バリ島に移住する日本人女性の実例から』『文化』Vol. 77(3-4), 東北大学文学会, p.89-103.
- 政府統計の総合窓口 (e-Stat)『調査項目を調べる—人口動態調査（厚生労働省）』「夫妻の国籍別にみた年次別婚姻件数」<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003214861>. (2020 年 3 月 3 日閲覧)
- 宣 元錫 (2019)『なぜ韓国は重国籍容認に舵を切ったのか（特集 移民政策と国籍法）』『移民政策研究』Vol. 11, 移民政策学会, p.19-30.
- 多賀 太 (2016)『男子問題の時代?: 錯綜するジェンダーと教育のポリティクス』学文社, 240p.
- 高橋 均 (2016)『2000 年代型育児雑誌にみる父親の『主体化』』天童 睦子, 高橋 均, 加藤 美帆編『育児言説の社会学：家族・ジェンダー・再生産』世界思想社, p.78-113.
- 武田 里子 (2011)『ムラの国際結婚再考：結婚移住女性と農村の社会変容:』めこん, 268p.
- 武田 里子 (2016)『グローバル人材の議論と日系国際児：2015 年台湾調査から』『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』p.17-24.
- 竹下 修子 (2000)『国際結婚の社会学』学文社, 195p.
- 竹下 修子 (2004)『国際結婚の諸相』学文社, 198p.
- 谷口 龍子 (2013)『日本語排除から日本語受け入れへ：戦後台湾における言語政策、社会的環境の変容と継承日本語との関わり』『東京外国語大学論集』p.159-73.
- 谷口 龍子 (2019)『彼らはどのように理解されたいのか-日台バイリンガルのナラティブ分析試論』『東京外国語大学論集』p.149-66.
- 内政部統計處『統計資料動態查詢主目錄』<https://statist.moi.gov.tw/miest/stmain.jsp?sys=100>. (2020 年 3 月 3 日閲覧)
- 日本教育社会学会 (2018)『教育社会学事典』丸善出版, 883p.
- 丹羽 孝仁, 中川 聡史 (2015)『日本人若者が働くバンコクは「天使の都」か』『地理科学』Vol. 70, 地理科学学会, p.157-67.
- 服部 美貴 (2015)『台湾に生まれ育つ台日国際児のバイリンガリズム（在(台)出生成長之台日混血児雙語使用研究）』日本学研究叢書 16: 國立臺灣大學出版中心, 261p.
- 藤田 結子 (2008)『文化移民：越境する日本の若者とメディア』新曜社, 284p.
- ベッカー, S. G. (1976)『人的資本—教育を中心とした理論的・経験的分析. 佐野陽子訳. 東洋経済新報社, 299p.
- 松谷 実のり (2014)『現地採用移住の社会学的研究序説：グローバル化時代の多様な移住経験』『京都社会学年報』p.49-68.
- 宮崎 聖子 (2014)『現代台湾における子育てをめぐる言説の諸相とジェンダー』『アジア女性研究』Vol. 23, アジア女性交流・研究フォーラム, p.17-25.
- 尹 靖水, 百瀬 英樹, 黒木 保博, 中嶋 和夫 (2011a)『台湾の多文化家族の夫が妻から受ける虐待』『評論・社会科学』Vol. 95, 同志社大学社会科学会, p.1-18.
- 尹 靖水, 百瀬 英樹, 黒木 保博, 中嶋 和夫 (2011b)『台湾多文化家族の夫の日常生活に関連したストレス問題』『評論・社会科学』Vol. 97, 同志社大学社会科学会, p.41-58.

- 渡辺 幸倫 (2012)『新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集の作成：顔の見える地域作りのための基礎作業』トヨタ財団 2009 年度研究助成 (D09-R-0422), 338p.
- 渡辺 幸倫 (2014)「日本の多文化家庭の子育て課題 ―中国人、韓国人を妻とした日本人夫の語りから」川村 千鶴子 編『多文化社会の教育課題：学びの多様性と学習権の保障』明石書店, p.258-79.
- 渡辺 幸倫, 藤田 ラウンド幸世, 宣 元錫 (2015)「国際結婚家庭の子育て戦略：韓国在住韓日カップルの日本人「父親」と「母親」の語りから」『相模女子大学紀要』Vol. 79, p.9-24.
- 渡辺 幸倫, 藤田ラウンド 幸世, 宣 元錫, 李 坪鉉, 裴 曉蘭 (2016)「多文化家庭の子育て戦略の課題：日韓中の国際カップルへのインタビュー調査」『相模女子大学文化研究』Vol.34, p.1-26.
- 渡辺 幸倫, 久保 康彦 (2018)「タイ王国における日タイ国際結婚家庭の教育観：教育商品調達についての語りから」『相模女子大学紀要』Vol. 81, p.1-18.
- 渡辺 幸倫, 宣 元錫, 藤田ラウンド 幸世 (2019)「越境する結婚移住者の教育観に関する基礎調査：国際結婚した在外日本人父親の言説分析」『相模女子大学文化研究』Vol. 37, p.57-77.
- Hamano T. (2019). *Marriage Migrants of Japanese Women in Australia: Remoulding Gendered Selves in Suburban Community*: Springer. 2019. 179p.
- Ishii K. S. (2016). *Marriage Migration in Asia: Emerging Minorities at the Frontiers of Nation-States*. Kyoto University Press. 216p.
- Piper N., and Roces M. (2004). *Wife or Worker?: Asian Women and Migration*: Rowman & Littlefield Publishers. 232p.
- World Bank, Fertility Rate, Total (Births Per Woman). World Bank Group. <https://data.worldbank.org/indicator/SP.DYN.TFRT.IN>. (2020 年 3 月 3 日閲覧)

